シ ナ イ 通 信

第 8 号

平成18 年 3 月 27 日

NPO 法人　シナイモツゴ郷の会
TEL／FAX（0229-56-2150）
MAIL　shinaimotsugo284@ybb.ne.jp
http://www.geocities.jp/shinaimotsugo284/
989-4102　宮城県鹿島台町木間塚
字小地谷地 504-1 公民館内

進めようブラックバス駆除と希少淡水魚の復元

18　　2　18　　40　　18

広げようバス駆除の輪

待望の特定外来生物被害防止法が昨年６月１日に施行され、各地で市民によるブラックバス駆除の取り組みが始まっています。鹿島台町では昨年９月に２カ所でバス駆除の池干しが行われました。この中の 1 カ所では多数のバスが地元住民により駆除されました。他の 1 カ所は数年前の池干しでバスが駆除されたため池で、ここでは１尾もバスが確認されずスジエビやモツゴなどが多数認められました。この池干しによりバス駆除による生態系復元の効果を目の当たりにすることができました。さらに、県内各地で池干しが行われ、仙台市や築館町には郷の会のメンバーが支援に駆けつけています。郷の会は全国的にバス駆除の取り組みを支援します。

普及させようバス駆除新兵器

高橋副理事長が発案し宮城県が特許申請しているオオクチバス営巣センサーを装着した人工産卵床が製品化され 4 月からいよいよ販売されます。東北興商株式会社（　　TEL　022-288-1617　　制作販売し、郷の会が技術指導します。H16 年 4 月に特許申請以来、シナイモツゴ郷の会は２シーズンにわたって伊豆沼で試作品を設置して現場実験を重ね、昨夏、実用化に成功しました。

センサー装着人工産卵床を使うことにより初心者でも少人数で確実にバスの営巣を確認することができます。同時に、堅固な人工産卵床を提供することで、小人数の組織がバス駆除に参加できるようになりました。さらに、バスの生息を確認しているが産卵場や産卵期が不明な場合は、センサー装着人工産卵床を用いて営巣をモニタリングすることにより産卵場と産卵期を特定することができます。くわしくは　　/魚類学会発表をご覧下さい。

みんなでやろう伊豆沼ブラックバス駆除モデル事業

伊豆沼では全国に注目されながらバス駆除のモデル事業が始まります。今年も郷の会はバス・バスターズによるバス駆除市民運動に中核部隊として参加します。毎年、バスターズに参加した会員は、春から初夏にめまぐるしく変化する伊豆沼の大自然を満喫しながら汗を流しています。あなたも参加しませんか。

増やそう　シナイモツゴ

昨年から大阪ｺﾐｭﾆﾃｨ財団の助成を受けて始まったシナイモツゴ里親制度、今年は日野自動車グリーンファンドの助成金をいただいてさらにステップアップします。小学校などの里親にシナイモツゴ卵を預かっていただき稚魚まで育ててもらいます。今年はさらに育てて頂いた稚魚をバス駆除したため池へ放流しシナイモツゴの生息池を拡大します。郷

の会は里親制度を確立しバス駆除後の生態系復元を全国に先駆けて実現しました。シナイモツゴの採卵からふ化、稚魚の飼育技術は全国的に注目されています。この技術を駆使して里親運動を推進することにより、バス駆除後の生態系復元を各地に広めましょう。

確立しよう　日本初のゼニタナゴ繁殖技術

昨年、郷の会は最も難しいゼニタナゴの繁殖に成功しました。卵が産み付けられたドブガイを二枚貝の生息可能なため池へ移殖するという画期的な方法で、全国10カ所程度しかない生息池を新たに増やすことができました。これまで、水槽の中で人工繁殖した事例はありますが、貝の放流による繁殖の成功は日本で初めてということです。だれでもできる生態系復元技術がもう一つ生まれようとしています。今年

も技術を確立するために調査を続けますので、ご参加の上、滅多に見ることができないゼニタナゴの華麗な姿をご覧下さい。

活用しよう　自然のめぐみ　シナイモツゴ・ゼニタナゴ米

活用しよう　自然の恵み　品井沼ヒシ

品井沼特産のヒシを復元するプロジェクトが今年2年目の活動を開始します。今年は 30aの水田を利用して本格的な栽培試験を行うと共に、自生するヒシの調査も実施します。ヒシは水質浄化作用が抜群に高いことから、適正な栽培や管理による水田地帯の水質浄化などにも今後取り組めると思います。また、家庭で簡単にヒシ栽培を楽しめるペットボトルビオトープを提供し、郷の会のサポーターを増やす企画も実行段階に入っています。

(8　)

平成１８年度シナイモツゴ里親の募集

シナイモツゴ里親プロジェクト　（二宮）

品井沼ヒシのペットボトルビオトープ 2.7 1000　4　5 県内限定、	**伊豆沼バス・バスターズ募集** 伊豆沼のバス駆除へあなたの力を 4　7 8	**里親インストラクター** **をやってみませんか**

ゼニタナゴ産卵・仔魚生息調査ー3 月 5 日　鹿島台町ため池ー

（参加会員のデジタル日記から）

シナイモツゴBCC通信 45 号

ゼニタナゴ産卵調査は陽光を浴びながらの快適な調査になりました。結果は？

①ゼニタナコ産卵調査
調査は総勢 18 人の参加の下、にぎやかに始まりました。
ゼニタナゴ研究会の北島氏や進東氏などタナゴの専門家にご参加いただき、とてもハイレベルな調査になりました。
日差しは強かったのですが、日陰は分厚く結氷していて、水温は 3℃台と、山間のため池はまだまだ厳しい環境の中にあります。でも会員の中には調査しながら、フキの薹をしっかりゲットしている人もいました。

●元祖ゼニタナゴため池
　このため池ではこれまで昨年同期まで常に多くのゼニタナゴの産卵が確認されていましたが、今回はとても残念な結果になりました。採集した 132 個のドブガイ中、産卵があったのは 2 個という惨憺たるものです。
想定される原因1：水質など環境条件の悪化・・・確認必要
想定される原因 2：ドブガイの減少・・・調査結果から減少していないので、これが原因ではない。
想定される原因 3：ブラックバスの侵入・・・昨年 4 月のインターネット 2 チャンネル事件が頭をよぎる。
　今後の方向：ゼニタナゴとブラックバスの生息調査を続け、必要なら池干しを行って、根本的解決を目指します。

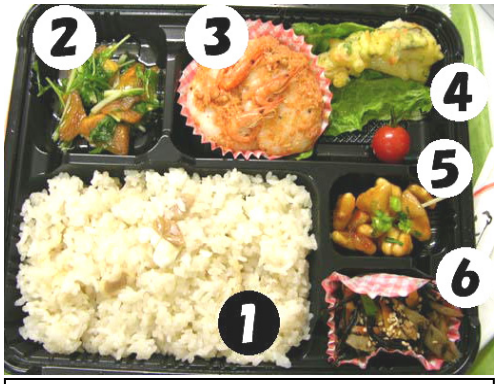
●移殖ため池
2004 年に移殖し大繁殖したため池です。
16 個のドブガイを調査した結果、5 個体でゼニタナゴ仔魚が確認されました。
数尾から 70 尾とドブガイ 1 個あたりの仔魚数も多く、極めて順調です。
今後は、このため池を拠点として、生息域の拡大を図ることになります。
添付写真をご覧下さい。→先の黄色のウジムシが鰓の中から取り出した仔魚・・・取り出すと体をよじってウジムシ運動をします。
鰓の中の仔魚（→）はわかりにくいですが、鮮やかな黄色を目印に何とか識別できます。
貝の中から浮出する 5 月以降が楽しみです。

シナイモツゴとヒシの集い～第１部　品井沼ひし試食会

～　シナイモツゴとヒシの集いを振り返って　　品井沼ひし特産化プロジェクト　佐藤　豪一（ひでかず）

2

12



2

1

2　　5

移動研修会のお知らせ

田沢湖町イバラトミヨ生息池　トンギョの会との交流
期日：平成 18 年 4 月 23 日（日）　　7　45
参加費：1,000～2,000

品井沼ヒシの復元を

30

シナイモツゴとヒシの集い

～第２部「情報交換セミナー」～

坂本　啓

♪♪声に出して読みたい日本語♪♪

石井ファミリーの　だじゃれ十連発　ー川魚編ー

1
2
3
4
5
6
7　♪　♪
8
9
10
　1　2　3

　3　！！！

シナイモツゴ里親紹介　　東松島市立小野小学校４年生の皆さん

大阪コミュニティ財団をはじめ、いろいろのご支援をいただきながら、里親制度の取り組みが着実に広がっています。昨年は個人の里親のほかに、学校単位で里親活動をはじめる学校も増えてきました。そのひとつ、小野小学校の活動を紹介します。

小野小学校は、近くを並行して流れる鳴瀬川と吉田川の堤防に沿った小野地区の町中にある、各学年１クラスのこじんまりした小学校です。そこで里親として熱心にシナイモツゴを育ててくれたのは４年生の皆さんです。

私たちが学校を訪問したのは、学年末も間近い 3 月 22 日ですが、子供たちはみな元気に挨拶をしてくれました。折角来たということで、一度は片付けたシナイモツゴ研究の壁新聞や、子供たちの個人研究の作品を見せていただきました。インターネットで調べたり、辞書で難しい言葉を調べたりしながら、一生懸命に取り組んだ様子が良く分かります。

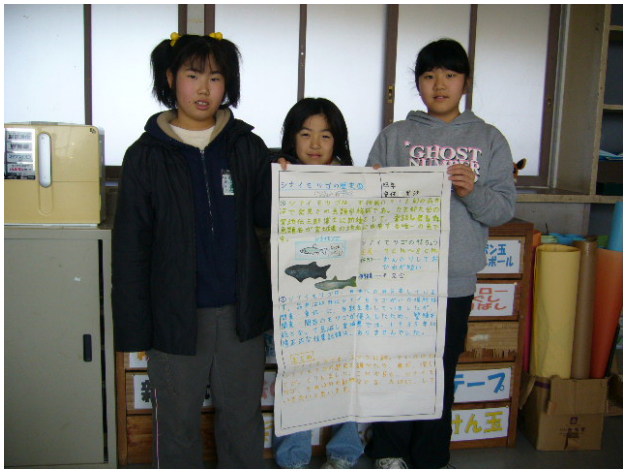
校舎の正面玄関の前に専用の池があり、適度な濁りのため魚の姿はよく見えませんでしたが、厳しい寒さをを乗り越えて無事越冬したのでほっとしたと教頭先生が話してくれました。

昨年春に受精卵を入れて以来、子供たちは孵化を待ちかねていましたが、偶然入り込んだ小さなおたまじゃくしを大事に育て、後からシナイモツゴではないと気がついて，大騒ぎしたとか、いろいろエピソードがあったようです。その後、最初の稚魚を一尾発見してからは次々と稚魚が現れるのを感動しながら観察していたとのことです。

４月からは新４年生が新たに卵から育てる里親として活動をする方向で、小野小学校と郷の会の間で日程を調整しています。この１年間シナイモツゴを育ててきた子供たちは、絶滅危惧種の魚を自分たちが育ててきたのだという達成感と同時に、その魚が今後どこに行くのか気にかけていると、指導に当たられた阿部先生からお聞きしました。

郷の会としては、子供たちが育てたシナイモツゴは、一部はこの子供たちが卒業するまで学校の水槽で育てていただき、それ以外は、学校と相談しながら、さらに子孫を残せるように、安全なため池への放流をしていきたいと考えています。

最初の里親校である鹿島台小学校を初め、仙台市の大倉小学校や蔵王町の円田中学校でも熱心に育てていますが、今年度は新たに 3 つの学校から打診があり、シナイモツゴの保護の輪がさらに大きく広がろうとしています。



シナイはアイヌ語で大きな川(沢)を意味します。小さな流れが大きな川になるように地道な活動を続けていきましょう。